

民を憐れむ神

出エジプト記17:1～7

マルコ6:53～56

今コロナが感染爆発している中で、私どもは不安の中にいます。命の不安、経済面での不安、人との繋がり
の不安などあることでしょう。外出を控え自宅にすることが多くなり、家庭内でのめごとやストレスが
多くなったという報告も聞いています。人は不平不満を自分より弱い者に、あるいは自分を守ってくれる優
しい人にぶつけやすいものです。

イスラエルの民は、モーセによってエジプトから奴隷状態を解放されて、今シナイ半島を旅しています。
エジプトを出た時は、まるで凱旋するような気持であったでしょう。虐げられた状態から解放され、追っ
てきたエジプト軍は海にのみ込まれたのです。意気揚々と希望を持って旅に出たのです。率いてくれたモー
セを讃え、自分たちを救ってくれた神に感謝し、讃美しました。男だけで60万いたということですから、女、
子どもを合わせると100万は越えていた大きな群れであったのです。彼らが彷徨したのは荒野でした。こ
の大群の日々の食料や水を確保するのは、大きな課題であったことでしょう。何せ荒野ですので、それら
を調達するのは大変であったと想像できます。人間が生命を保つには、空気の次に必要なのは水でありま
す。水は生物が生存するには必要なものであります。また水には他の面もあります。体を清潔に保ったり、
物を洗ったりする役割があります。しかしまた洪水などのように、例えばノアの洪水や、モーセたちが通
った葦の海の水、また今現在あちらこちらでの水害のように、人の命を奪うこともできるものなのです。で
すから水と言うのはいわば人の命を左右する物質であると言えるでしょう。荒野には水は少ないものです。飲
み水がなくなると民はモーセを責めました。「水をよこせ」と。旅には旅程があったようです。それに従
って進んでレフィディムに行ったのですがそこには水がなかったからです。そこで民を率いていったモー
セが責められ、主の命令に従ったわけですから民は主に対しても不平がありました。奴隷状態から救ってく
れた神そして率いてくれたモーセに不平不満を言い責めたてたのです。こんなことなら奴隷であってもエ
ジプトにいたほうがよかった、などと再び言ったことでしょう。実際に彼らはモーセに向かって、われわれを
殺すつもりでエジプトから導き上ったのか、と八つ当たりをします。エジプトを出た時の感謝と喜びはど
こへ行ってしまったのでしょうか。モーセはこの自分勝手な民にほとんど困ってしまいます。確かに民とすれば、
飲み水がなくなってしまうと死ぬしかないことを、モーセに向けるしかなかったのかもしれませんが。困
ってしまったモーセは、神に助けを求めます。これを聞いた神は、民を叱るのではなく、民の願いどおりに水を
豊かに与えるのです。神は命じました、長老数名を伴って前に進めと。これは神の力の承認として選ばれた
者たちです。神の力がモーセだけでなく、長老たちにも見せられて民に伝えられるべきであったのでしょ
う。また神はモーセに杖を使って岩を叩くようにと命じます。その杖は、以前にナイル川を打って水を分けた、
神の力を示す道具としての杖です。この杖で再び民を救うと言われるのです。またこの杖を示すことによ
って、主が海を分けたことを思い起こさせるのです。モーセが長老たちの目の前で、主が言われたとおりに、
杖で岩を打つと水がほとぼしり出たのです。モーセはただ主が言われたとおりにしました。自分の考えや力
に頼ることなく、神のいわれたとおりにすることによって、そこに神の力が示されたのです。人々はそこで
十分水を飲むことができました。モーセはその場所をマサ（試し）とメリバ（争い）と名付けました。なぜ
ならそこで民がモーセを責め、また神を試したからでした。人は自分の思い通りにならないと責める行動や
争いに出ることでしょう。争い事と言うのは大なり小なり自分の思いを通して行くことによるものです。ま
た民はモーセを責めただけでなく、神をも試したとあります。そもそも試すというのは自分が主となって行

うことです。民は神に対して立場が逆転しているのです。しかしそのような民に対しても、神は怒ることなく、また罰することもなく民の願いどおりに水を与えました。このように不信仰で自分勝手な民に対して、神は憐れみ、慈しまれたのです。モーセはその場所をマサ（試し）とメリバ（争い）と名付けたのですが、それによって、人がこの場所でその名を聞くときに、この民の不信仰を思い起こさせるためであったのです。しかしただ不信仰を思い起こすだけでなく、それにもかかわらず、神は民を憐れみ、大きな恵みを与えてくださったという神の慈愛を思い起こさせるためでもあったのです。私どもはここでアブラハムの子であるイサクのことを思い起こします。イサク、すなわち笑うというのはアブラハムとサラの不信仰にもかかわらず、神は恵みを与えてくださったのです。このイサクと言う名を呼ぶたびに、彼らは自分たちの不信仰と、また神の大きな愛と約束を思い起したことでしょう。神は御自身が選んだ者たちを決して失うようなことはなさらないのです。神自身が必ず守り導いてくれるのです。

神はモーセを通してその御力を示されました。そしてイエスさまはそのお働きによって父なる神の御力と愛を示されました。群衆はイエス様を追いかけました。イエスさまが食事をしていないとか、疲れているかとかはお構いなしに押し掛けるのです。我先にこの病をいやして頂きたいと、夢中でイエス様を捜してついて行くのです。自分本位の群衆の行動が目に見えるようです。中には自分ではなく家族や友人のために押し掛けるものもいたでしょう。しかし或いはイエス様に示された神の業を見てみたいと思ってくる人、この病は直せるだろうかとか試すような人もいたかもしれません。そのような群衆に対しても、ここではイエス様はすべての者を癒されました。救われたのです。イエス様にとってご自身が働かれるのは、民の目を父なる神の愛と全能に向けるためでありました。ところが訪れた連中はイエスさまの思いとは別に、とにかく癒されたい、奇跡の業をこの目で見たいという思いでいっぱいでした。そのような群衆の心を、イエス様は勿論見抜いていたことでしょう。それでもイエス様はそのような無理解な群衆を憐れみつつ、癒されたのでした。

ここではすべての者が癒されたとありますが、しかし人はたとえある病や障害が癒されたとしても、生き続けていけば次なる病や苦難に出会うでしょう。生きるというのはそういうことです。負っていた病が癒されれば、人は喜び感謝するものです。しかし次なる病に襲われたらまた救いを求めることでしょう。癒されればそれでよいのですが、たとえ癒されなくてもその病を負いつつ生きる人生もまた恵みになることがあるのです。このようなことを言うと、重い病や障害を持って苦しんでいる方々に、分かったようなことを言うと言われるかもしれませんが、なぜならその病を負わなければ見えてこないものがある、その妨げがあるからこそ分かること、見えてくる世界があると思うのです。またその苦しみを通しての出会いもあることでしょう。自分の苦しみを本当に分かったださり、それと共に歩んで下さるお方がいるということです。病や障害は本人には辛いことではありますが、健常者にはわからない別の価値や見方、或いは考え、出会い、生き方が生じてくることもあるものでしょう。

神様はわたしども一人一人に目をかけてくださり、そして憐れみ、愛して下さっています。人それぞれにはそれぞれの弱さがあることでしょう。わたしどもはそれを何とか克服したいと願うことでしょう。また人にはそれぞれの望みや願いがあることでしょう。私どもはそれが何とか実現すればと願うことでしょう。人間は基本的には自己本位な生き物です。自分の思いや願いがかなうように行動するものです。しかしこの世ではそれが障害にあって妨げられることがあります。そのようにどうにもならないような時でも、憐れみ深い主は窮地にあるものに救いを示してくださいます。人の目から見れば、不信仰であると思える者に対しても、神さまの愛は注がれるのです。その深くて広い愛を知ってこそ人は立ち直ることができるし、また新しい歩みができるのです。そのように人生に希望を与えてくださるのが、憐れみに満ちた主の愛なのです。